

死を迎える前に

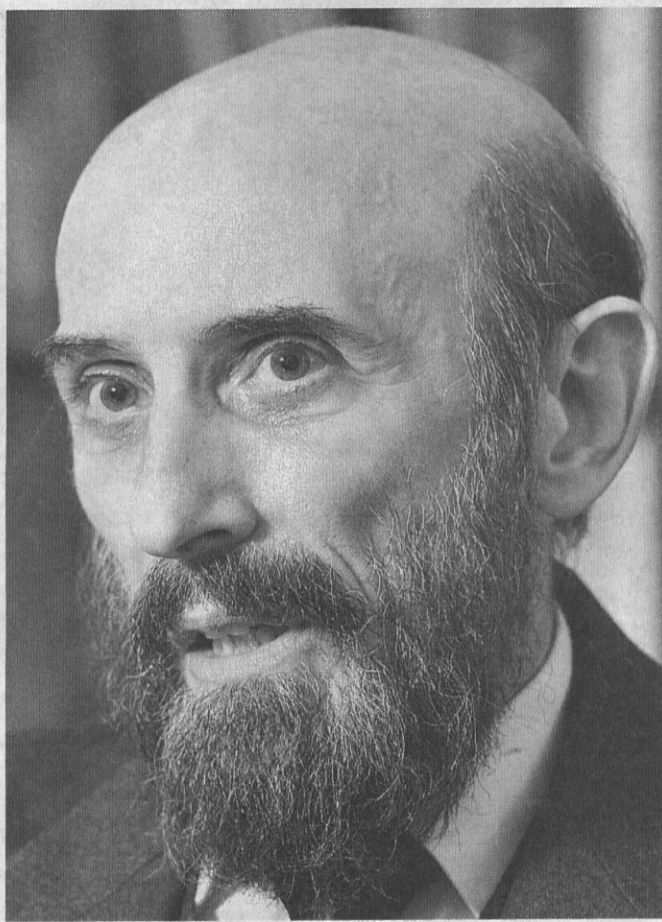
死をタブー視する社会 を変える教育を

米国のハワイ大で学んでいたところに、日系人の末期患者が潔く死んでいく姿や、家族のみとりの様子に感銘を受けた。1975年に来日して京都大などで日本古来の死生観や宗教観を研究。死を迎える伝統的な知恵を明らかにし、時代の変化にも着目した。

「戦前までの日本は死を自然の摂理、次の世への出発であると受け入れ、死を怖がらない社会でした。しかし私が来日したところから死の迎え方が大きく変わります。それまでは8割が自宅、2割が病院で亡くなっていったのが、70、80年代に逆転し、今や病院死が8割以上。長寿にもなつて、身近に死をみとる経験が減り、死が知らない怖いものになりました。死を覆い隠す社会が死への恐怖と無知を生み、残酷な殺人や自殺につながる面もあると思います」

「大家族でない米国では、ベトナム戦争の経験も経て8年ごろになぜ、どのように死んでいくのか、なぜ、どのように生きていくのか」という死生観教育が学校に取り入れられました。しかし日本では、誰もが経験する死について学校

カール・ベッカーさんに聞く



京都大学こころの未来研究センター教授兼大学院人間・環境学研究所教授。1951年米国イリノイ州生まれ。ハワイ大学で比較宗教学を学んだ後、京大などで日本人の宗教観や死生観を研究。日本にふさわしい医療倫理・環境倫理の研究と教育を進める。著書に「死の体験」「生と死のケアを考える」など。

一日を大事に反省込めて

「日本の死生観教育は、ぬいぐるみや財布をなくして寂しい、悔しいという喪失体験から始めるのがよい。亡くなった祖父の思い出などに つなげて死の話へのタブーをなくしていく。喪失体験を乗り越える技術と同時に、かけがえのないものに気づかせる教育ができるはず」

「かつてはお寺でお坊さんが漢方や鍼灸で檀家や門徒の回復を祈り、治らなければ枕経をあげて家族のカウンセリで教えず、生のリアリティも希薄になっていきます」

「扶桑略記」などの古文書を研究するとともに、日米で数十人の臨死体験者から話を聞き分析してきた。

「死を恐れるのは、まだやるべきことを十分やっていないというほかに、死がすべての終わりと思つからず、臨死体験者はみな、この世だけで説明できない意味が絶対にある」と言います。この人生が小学校のような段階であり、魂や意識がこの体を卒業して

「死を恐れるのは、まだやるべきことを十分やっていないというほかに、死がすべての終わりと思つからず、臨死体験者はみな、この世だけで説明できない意味が絶対にある」と言います。この人生が小学校のような段階であり、魂や意識がこの体を卒業して

来世とも向き合う

「死を恐れるのは、まだやるべきことを十分やっていないというほかに、死がすべての終わりと思つからず、臨死体験者はみな、この世だけで説明できない意味が絶対にある」と言います。この人生が小学校のような段階であり、魂や意識がこの体を卒業して

「死を恐れるのは、まだやるべきことを十分やっていないというほかに、死がすべての終わりと思つからず、臨死体験者はみな、この世だけで説明できない意味が絶対にある」と言います。この人生が小学校のような段階であり、魂や意識がこの体を卒業して

「死を恐れるのは、まだやるべきことを十分やっていないというほかに、死がすべての終わりと思つからず、臨死体験者はみな、この世だけで説明できない意味が絶対にある」と言います。この人生が小学校のような段階であり、魂や意識がこの体を卒業して

うたた寝

イワウチワイワ
メ科の常緑多年草。
や岩場に生え初夏に
紅色の花が咲く。ウ
ワの名は葉の形から

縁は縁を呼ぶ。20
年からスタジオリ

平野 恵理子